



輝ける星の戦場 『残夢』

死者の断末魔を喰らい

孤独な女王は完成する

【オルガエンジン】シリーズ

生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア戦闘メカアクション・ハードSF

著：XYZ_L

輝ける星の戦場

『残夢』



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系

ディストピア・ハードSF・メカ・バトルモノ

「オルガ・コード」シリーズ

著:XYZ_L

第1章:結晶化する絶望

場所：ニューファンドランド島東海岸沖（47°30' N, 52°30' W）

日時：2025年5月15日 14:40

海面を覆う重い霧を、20機を超える無人機（ハウンド）が放つ無慈悲なレーザーキャノンが貫いていく。

ラブラドル海流に運ばれた流水が巨大な墓標のように海面を漂い、霧の奥で不気味な白光を放っていた。

この「アイスバーグ・アレイ」を完全封鎖し、逃げ場を失った残党を根絶やしにすること。

それが連合からセレナ・ノヴァリスに与えられた任務であった。

連合の最新鋭機 XN-00「ネクサス・プロト」。

そのコックピット内は外界の喧騒とは無縁の静寂に支配されている。

網膜へ直接情報を投射する全球パノラマモニターには、戦域の熱源と質量が冷徹な幾何学模様のデータとして置換されていた。

戦術データリンクが各ハウンドの相対位置を秒間数百回の頻度で更新し、緑色のグリッドが虚空を覆い尽くしている。

空調は完璧に管理され、深く沈み込む半仰向けのシートがセレナの肢体を優雅に保持している。

無機質な消毒液の匂いと、隠しきれない甘い蜜の香りが湿度を伴ってわずかに混じっていた。

「教団の聖女などと崇められていても、この程度の包囲陣形すら突破できない。……これが教団の限界です」

セレナの声はノイズ一つないコンソールの中で静かに響く。

サイドを丁寧に編み込んだ銀髪が計器の光を反射し、紫水晶のような瞳がモニターの照準カーソルを冷たく射抜いていた。

彼女の肢体を包むのは機動兵器の一部であることを示すグレーの強化スーツ。

その内側、膣内と後孔の奥深くへと楔のように打ち込まれた2本のオルガデバイスからは、しなやかなフレキシブル有線が伸びていた。

スーツのポートを介して、機体のメインシステムへとダイレクトにリンクされている。

『オルガデバイス、安定稼働を確認。……サイコ・ミュー、同期開始』

無機質なシステム音声に呼応し、デバイスが暴力的な旋回を開始した。

脳髄を灼くような粘り気のある快樂パルス。

子宮口を直接蹂躪し、神経系を介して最短距離で火器管制システム（FCS）へと送り込まれるこの「熱」を、セレナは冷静な指先の操作で殺戮のエネルギーへと変換する。

（……っ、完璧な出力。流石は、父様の設計ですね）

自分の意思とは無関係に、兵器の動力源として淫らに反応し続ける肉体。

その美しすぎる「仕様」を全方位から記録されている事実屈辱と全能感を同時に覚えながら、セレナは静かに告げた。

「初撃（ファースト・ストライク）、行います。ジェネレーター直結」



彼女が右腕の粒子ライフルのトリガーを絞る。

紅い閃光が霧を焼き切り、輸送艇を庇う防衛機1機のエネルギーシールドを紙細工のように引き裂いた。

装甲材が沸騰し、激しく火花を散らす。

『きゃああっ！』

『サフィラ！ シールドが！』

通信帯域から漏れる聖女たちの悲鳴。

その絶望を肯定するように、ネクサス・プロトの演算ユニットが最高効率のエネルギー源として、パイロットの神経系から発せられる「快樂パルス」を検知する。

パイロットの精神高揚を物理的なジェネレーター出力へと変換するサイコ・ミュー。

その同調率（シンクロレート）の上昇に伴い、股間のデバイスが一段と激しく跳ねて子宮の奥を無慈悲に突き上げた。

「んっ……」

熱い、粘りけのあるパルスが脊髄を駆け上がる。

理性がどれほど拒絶しようとも、兵器の一部と化した肉体は入力された信号に忠実な喘ぎを漏らしてしまう。

（……っ、……！）

潤んだ紫水晶の瞳に屈辱の光が宿る。

だがその生理的な空白を縫うように、流水の隙間をねじ切る白銀の輝きが突入し、戦域の予測データを強引に書き換えた。

教団のエース、イラストリアスの駆るセラフィム級だ。

『全機、最大戦速で戦域を離脱なさい。ここは、わたくしが引き受けます』

「.....来ましたね、教団の『大聖女』様。わたくしが、直々にお相手いたします」

セレナの紫色の瞳が鋭く細められた。

サイコ・ミューが導き出す未来位置予測に基づき、ハウンド5機を前衛に押し出し、牽制の弾幕を張る。

同時にネクサス・プロトの粒子ライフルと肩部の粒子キャノンを連動させた。

回避不能なクロス・ファイアを描き出す。

敵機の質量、スラスターの出力推移、風向き。すべてを計算し尽くした必殺の弾道計算。

『予測進路アルファ、ベータ、共にロック。回避確率1.2%』

「落ちなさい」

セレナの指がトリガーを引く。

絶対の死を約束する光の奔流が、白銀の機体へと殺到した。

だが――。

イラストリアスは機体の推進器を暴走寸前まで吹かし、関節部を限界まで軋ませる超高機動でそれをすり抜けた。

回避行動の最中、セラフィム級の背部と脚部から、スラスターの推力リミッターが爆発的にパージされる。

「.....なっ!？」

セレナの息が詰まる。

(機体の安全装置を強制解除した.....？ あれでは自壊してしまいますわ！)

安全装置という「枷」を吹き飛ばした白銀の機体。

それはAIの予測軌道を暴力的なまでの異常推力で大きく逸脱し、あろうことか連合のハウンド部隊の群れの中へと飛び込んできたのだ。

彼女は目前のハウンド数機をプラズマブレードで一閃。

破壊したばかりの敵機の残骸をデブリ・シールドとして引きずりながら、セレナの予測射線を強引に遮断して肉薄してくる。

「野蛮な戦法.....っ。ですが、その無理な機動、機体も貴女の身体も長くは保たないはずですよ！」

戦術モニターが示すセラフィム級の排熱レベルは、すでにレッドゾーンを振り切っていた。

関節部からは異常な摩擦熱を示す白煙が噴き出し、オープン回線からはイラストリアスの限界を超えた荒い息遣いが漏れ聞こえてくる。

『はぁっ……あ……っ、まだ……、届く……ッ！』

熱暴走による機体爆発か、神経への過負荷（オーバーロード）によるパイロットの死か。

どちらが先に来てもおかしくない状態だ。

しかし、その捨て身の突撃がネクサス・プロトとの距離を致命的なまでに縮めていた。

味方機と重なるように接近する白銀の影。

AIは誤射による味方機体へのダメージを避けるため、自動的に射撃プロトコルを停止させる。

「プロトコル解除！ 撃ちなさい！」

セレナの叫びも虚しく、計算された論理的な隙が致命傷を招いた。

爆炎を切り裂いて、白銀の銃口が現れた。

30mmガトリング砲『パージファイア』が、ゼロ距離で徹甲弾の雨を吐き出す。

ガガガガッ！

装甲を削り取る、凄まじい着弾衝撃。

『ネクサス・フィールド、位相崩壊（フェイズ・ダウン）。……衝撃、相殺不能』

システムの警告と共に電磁防御壁が碎け散る。

セレナは即座にスラスターを吹かして回避行動に入ったが、フィールドの崩壊が僅かに早かった。

姿勢を大きく崩したネクサス・プロトのコックピットで、セレナの額に初めて一筋の脂汗が滲む。

「くっ……姿勢制御が……！」

機体を立て直そうとしたコンマ数秒。

イラストリアスの放った熱源追尾型の誘導ミサイルが、チャフを撒く間も与えない回避不能な角度から肉薄した。

ドォン！！

複合装甲へ直接叩き込まれた爆圧。

ワインレッドのラインが走るグレーの装甲が熱波に焼かれ、内部の電子回路と冷却液を露出させながら剥ぎ取られる。

右肩の粒子キャノンは衝撃でひしゃげ、沈黙した。

機体が受けた破壊のデータと、内臓を押し潰すほどの激しい慣性G。
。

それらは瞬時に、過負荷の快樂パルスへと変換される。

フレキシブル有線を逆流した絶大なる暴力が、セレナの膣壁と子宮へ限界を超えたフィードバックを叩き込んだ。

「ひっ……あ、ああっ！！♥」

激痛と、腹の奥で爆ぜるような快感が混ざり合う。

視界が真っ白に灼け焦げ、意に反して子宮が甘く収縮した。

脳幹を揺さぶる絶頂の波が、機動を停止させる「0.8秒の空白」を引き起こそうとする。

だが死の淵に立たされた恐怖が、エリートとしての矜持を激しく燃え上がらせた。

「このような、旧式機に……わたくしが……ッ！」

セレナは嚙み締めた奥歯から血を流す。

股間から込み上げる絶頂の震えと蜜を力ずくで押さえ込み、操縦桿をねじ伏せた。

再び粒子ライフルの銃口を向け、赤いモノアイでイラストリアスを睨みつけるように砲塔を旋回させる。

しかし、HUD（ヘッドアップディスプレイ）で点滅する赤いアラートが彼女を現実に戻した。

全体損傷率32%。

asset（資産）としての価値をこれ以上損なうことは、開発責任者である父の顔を汚すことに等しい。

自分は、父が設計した最高級のパーツなのだ。

『戦域離脱を推奨。機体コンディションの悪化に伴い、戦果期待値が規定ラインを下回りました。即時帰還し、メンテナンスフェーズへ移行してください』

「.....無意味な消耗は避けるべきです。わかっておりますわ」

セレナは荒い呼吸を整え、メインスラスタを全開にする。

短く機体をバンクさせると、黒煙を曳きながら圧倒的な加速で戦域を高速離脱していく。

離脱するバックモニターの隅で、セレナは「獲物」の異変を捉えた。

死線の直後に訪れた、不自然なほどの推力喪失。

限界を超えた超高機動を支えていた白銀の機体は、メインジェネレーターの火を完全に落とし、慣性に流されるまま無防備な放物線を描き始めたのだ。

虚空を掴んだあられもない姿勢で関節を硬直させ、ただの重い鉄塊となって空中を滑落していく。

装甲の隙間から噴き出していた白煙が止まり、殺意に満ちていた機体の挙動が不気味なほど静まり返っていた。

オープン回線から聞こえていたイラストリアスの荒い息遣いも、すでに途絶えている。

オーバーロードの果てに何が起きたのか、同じ呪いを身に宿すセレナには痛いほどに理解できた。

「逃がしません。貴女のその強い意志が、今、貴女自身を殺すのですから」

セレナが確信に満ちた指で戦術マップを展開し、全ハウンドにマルチ・ロックオンを命じた。

白銀の機体は、墜落の軌道を描きながらも自律的な姿勢制御すら行おうとしない。

限界を超えた機動と過負荷によって抑制の効かなくなった肉体がもたらした『絶頂硬直（オルガ・パラドックス）』。

「さようなら、聖女様。チェックメイトです」

20機以上のハウンドが放つレーザーが収束し、あられもない姿で滑落していく天使を正確に貫く。

白銀の翼をもがれ、誘爆を起こしたセラフィムが、きりもみ状態でニューファンドランドの浅瀬へと墜ちていく。

巨大な水柱が上がり――。

静寂が、戦場を支配した。

モニターに浮かび上がる Mission Complete の文字。

周囲を漂う記録ドローンが、その「完璧な勝利」を余さず記録していた。

セレナは濁った瞳でそれを見つめ続けていた。

「.....assetの回収は後続の部隊に。わたくしは機体のメンテナンスのために帰還します」

セレナは操縦桿を引き、機体を北米第7要塞へと向けた。

完璧なデータ、そして完璧な勝利。

それこそが父への、そして連合への唯一の回答なのだから。

第2章:虚構の星冠

1.銀灰の檻、加工された英雄

霧が強化ガラスを柔らかく撫でる。

要塞都市「エテルナ」の最上層。

セレナ・ノヴァリスの私室は、冷徹なまでの「白」に浴していた。

薄いシルクの寝衣がしなやかな腰の曲線に寄り添う。

朝の光が滑らかな肌を照らし、銀白色の長髪がシーツの上に乱れた銀糸のように流れ落ちていた。

紫の瞳が静かに開く。

その瞳は連合の遺伝技術が母の代から磨き上げたものだ。

彼女において一つの完成を見た、完璧な製品（アセット）としての輝きを宿していた。

『セレナ様、起床時刻 06:00。体温 36.3度、心拍 67。前日の戦闘による神経系汚染率 32% は中和完了。生理的な過敏状態が継続していますが、データ収集には最適なコンディションです』

天井のスピーカーから流れるAIの声。

セレナは起き上がり、優雅な所作で窓際に歩み寄った。

(.....32%の残響。皮膚が異常な熱を帯びているわ。父様の調整が、わたくしの神経を最高純度まで研ぎ澄まさせてくれている証拠ですね)

強化ガラスの向こうには霧に浮かぶ黒い大理石のビル群が見える。

連合の心臓部「ネオ・ロサンゼルス」が墓標のように冷たく突き刺さっている。

眼下の街路は幾何学的なグリッドに支配されていた。

下層市民の生活という「ノイズ」を排した管理の極致。

彼女にとって、この静寂こそが「秩序」であり「正義」であった。

首元の金のネックレスが脈動に合わせて微かに振動した。

位置情報とバイタルを管理し、彼女を連合のシステムへ繋ぎ止める
「聖なる枷」。

彼女はこれを自分を守るための絆だと認識するように深く定義付けられている。

壁の供給ハッチが無音で滑り出し、朝食を無機質に差し出した。
合成美食の結晶である白いキューブを口に含める。

過敏になった舌の上で、人工的な甘さが鋭烈に爆ぜた。

（.....過剰な糖分。わたくしの細胞を満たす、最も効率的な栄養だわ。父様の計算に、寸分の狂いもないのですね）

不快なまでの刺激を「最適解」として嚥下する。

壁の監視カメラが赤いレンズを点滅させていた。

彼女の咀嚼し、嚥下する喉の動きさえもデータとして貪っているが、それは彼女にとって「愛されている」ことと同義であった。

「.....連合のために.....」

唱えられた言葉はOSの起動シークエンスのように脳裏を過り、霧の中に溶けて消えた。

シャワー室の温水が全裸の肌を滑り落ちる。

鏡に映る肢体は、かつて連合の最高級資産と呼ばれた母の面影を濃く継いでいる。

父・ノヴァリス博士の手によってさらなる最適化を施された、歪な進化の結末。

乳首や股間の感度さえも戦闘データの抽出効率のために調律され、彼女個人の意思が入り込む隙間はない。

一滴の温水が、過敏な胸の頂に落ちた瞬間。

電撃のような痺れが走り、セレナは小さく肩を震わせた。

北大西洋の冷たい霧の中で、イラストリアスの異常推力による猛攻によって叩き込まれたあの衝撃。

内臓を押し潰すようなGと、子宮を焼き焦がした過負荷のフィードバック。

32%の汚染自体は中和されたが、極限の負荷に晒された代償は大きかった。

感覚神経は一時的な過敏状態に陥り、あらゆる刺激を増幅して脳へ送り込んでいる。

（.....熱い。これは準備。これから授かる『ステラ』を受け入れるための、最高のソケットにならなくてはならないのですから）

肌を滑る温水さえが、淫らな刺激となって脳を揺さぶる。

意に反して腰が震える。

微かな水圧の刺激だけで脳髄を灼くような痺れが走った。

「んっ.....あ.....っ」

紫の瞳を潤ませ、不自然な快感に身体が跳ねる。

それは彼女にとって「兵器としての高効率な反応」であり、父様が私を完璧にしてくれたという狂信的な悦びでもあった。

シャワーを終えた彼女は私室のモニター前に立った。

画面には専用機 XN-00「ネクサス・プロト」の戦闘映像が映し出されていた。

数日前の北大西洋での記録。

だがそこに映っているのは、セレナの知る真実ではない。

映像の中の機体は一筋の煙も吐かず、剥落した装甲など初めからなかったかのように冷徹な鋼色（はがねいろ）の光を放って舞っている。

セレナが奥歯から血を流し、絶頂の濁流を力づくでねじ伏せて機体を支え続けたあの死闘。

捏造された映像では、その執念や苦悶の表情はすべてデジタル処理で消し去られていた。

代わりに一分の隙もなく優雅に敵を屠る、汚れなき女神の姿が描かれている。

映像の中の自分は、恐怖に震えることも、汗を流すことさえない完璧な輝く人形。

セレナは過敏になった指先で自身の腕を抱きしめた。

その加工された自分を冷めた瞳で見つめ返す。

本物の死闘の泥臭さを知っている。

それなのに、この偽物の自分にどうしようもなく憧れてしまう。

（.....あんなに美しく、機械的に勝ったわけではない。.....でも、次はあのように戦ってみせる。わたくしが、連合の希望になるのだから）

自嘲と決意が混ざり合った、その思考の歪みが脳裏を掠めた瞬間。

金のネックレスが激しく脈動した。

動揺を検知したシステムが強制的な忠誠心を呼び戻す薬液を静脈へと注入する。

不快な胸騒ぎは、瞬時に熱を帯びた「法悦」へと塗りつぶされた。

AIが今日という日の役割を告げる。

『技術披露会 08:30 開始。希望の星として、新型オルガデバイスの性能展示とデータ収集にご協力ください』

自動クローゼットが開き、式典用の白いドレスが差し出された。

「ネクロ・シルク」で織られた生地は霧のように薄く、光を完全に透かす。

その下に肌を隠すための布は一切用意されていない。

ドレスを手にとった彼女の指が重苦しく震えた。

「.....これを着て、披露会に出るのですか？」

その声には高潔な優等生としての当惑が混じっていた。

衆目の視線に晒されることへの恐ろしさ。

だがそれは「恥」というよりも、「純潔な象徴としての自分」が汚されることへの不備を危惧する反応に近い。

『不必要な情緒を排除してください。デバイスのリンク精度に影響します』

AIの断定とともに、ネックレスから脳を灼く電撃が走る。

セレナ・ノヴァリスの身体が小さく痙攣した。

「あ、が.....っ.....！！」

激痛は即座に注入された薬液によって「強制的な平穏」へと置換される。

心は薬がもたらす多幸福感に包まれているというのに。

胃の腑には微かな吐き気が残り、指先は人間としての恐怖に小さく震えていた。

彼女はその震える手で吸い付くようなドレスを纏い、自らを完璧な供物へと変えていった。

全身を映し出す大型の姿見の前に立つ。

セレナはそこに映る「希望の星」の姿を、虚ろな、しかし静かな恍惚を湛えた瞳で見つめた。

「ネクロ・シルク」の白は、彼女の肌の上で霧のように霧散し、隠すべき肢体を残酷なまでに露わにしている。

布地は豊かに膨らんだ乳房の頂を隠すこともなく、その鋭く突き立った突起の形を透ける白の向こうに鮮明に浮き上がらせていた。

腰から脚の付け根にかけてのしなやかな曲線は下着という遮蔽物を一切奪われている。

柔らかな産毛の輝きさえもが視線の餌食となるのを待っている。

(.....ああ。わたくし、こんなに.....綺麗に整えられているのですね)

薬液がもたらす多幸福感が、本来あるべき羞恥を「完璧であることの悦び」へと強引に反転させていく。

今の過敏な肌にとって、ネクロ・シルクの極細の繊維が擦れる感触は絶え間なく続く羽毛の愛撫に等しい。

一歩歩くたび、布地が秘部の粘膜や太ももの内側を優しく、しかし執拗に撫で上げる。

彼女の脳髓へ甘い痺れを送り込み続けていた。

耳元で揺れる紫水晶のピアスが冷徹な監視の赤光を吸い込んで妖しく明滅する。

金のネックレスが鎖骨の上で脈動し、彼女が「連合の所有物」であることを宝石のような輝きを以て定義していた。

鏡の中の自分は、もはや生身の女性ではない。

それは、磨き上げられた白磁の肌に「ステラ・デバイス」という神の火を宿すために用意された、最も美しく、最も無防備な祭壇だった。

通信モニターが点灯し、父・ノヴァリス博士の冷淡な顔が映し出された。

背後の大型スクリーンには、本日披露される新型オルガデバイス——『ステラ・デバイス』の三次元透過図が浮かび上がっている。

それはこれまでのフレキシブル有線とは一線を画す、無線式（サイコ・ミュー）の極致。

『過敏化したお前の神経データは、ステラ・デバイスの出力を調整する上で、これ以上ない良質なサンプルだ。物理的な鎖から解放され、目に見えない波がお前の胎内を蹂躪する快感……。それを完璧に見せつけろ。希望の星の名に恥じるな』

「.....了解いたしました。.....父様。わたくしは、希望の星として、務めを果たします」

薬液と電撃によって完全に「調律」された意識の中で、彼女は静かに頭を垂れる。

その紫の瞳にはもはや自身の意思による揺らぎはない。

ただ連合の未来を見据える、ガラス細工のような透明な光だけが宿っていた。

2.透けゆく星、霧の祭壇

首都要塞「エテルナ」の心臓部。

中央式典ホール「エリュシオン」は、冷たい幾何学模様の白大理石と、人工的な銀灰色の霧がゆらめく、連合の権力と頽廃が結晶化した巨大な実験場だった。



天井から降り注ぐシャンデリアの光が霧に乱反射し、周囲を白々と照らす。

空気は合成ワインの芳醇な香りと、警備のサイボーグ兵から漂う鼻を突く消毒液の匂いが澱（おり）のように混ざり合っていた。

すり鉢状に深く穿たれた会場の底。

眩い白光を放つ円形の祭壇を目指し、一本の白いランウェイをセレナ・ノヴァリスのドレスが無音で滑る。

「ネクロ・シルク」で織られた極薄の生地は死者の肌のように透き通っていた。

歩を進めるたびに彼女の肢体を残酷な解像度で暴き出していく。

(.....熱い。空気が、肌にまとわりつくようです.....)

前戦の過負荷によって限界まで閾値の下がった神経系にとって、逃げ場のない視線の群れは暴力的な「愛撫」だった。

会場を埋め尽くす支配階級の男たちは手にしたワインを揺らしながら、ステージを見上げる形で彼女を待ち構えている。

彼らが注ぐのは「最新兵器」を査定する軍人の目ではない。

獲物の肉を食い破る機会を窺う、飢えた獣のどろりとした執着そのものだった。

ゴクリ、と。

誰かが生唾を飲み込む音が、静まり返った会場に響く。

拍手すら忘れた異様な静寂と、低くざわめくような男たちの熱気が、肌を粟立たせる。

彼らの眼光は薄布越しに浮き上がる乳房の隆起を舐め、腰のくびれをなぞる。

そしてドレスが食い込んだ股間の、秘部の裂け目へと執拗に集束する。

どこを、どんな風に汚してやろうか。

剥き出しの欲望を隠そうともしない視線が、一步ごとに彼女の理性を削り取っていく。

男たちは口々に連合の未来を語りながらも、その瞳の奥では高潔な女神が自分たちの目の前で無様な「雌」へと墮とされる瞬間を、下卑た期待を以て待ちわびていた。

参列する女性たちもまた、ナノ技術で美貌を保たされた「所有物」として、主人の地位を示す最高級の装飾品に過ぎない。

その最前列に、母がいる。

自分と同じ、流水を溶かしたような銀糸の髪。

そして連合の至宝と謳われる紫水晶（アメジスト）の瞳。

40代でありながら高度なナノ技術によって20代の美貌を不自然に維持させられた、かつての最高級資産の成れの果て。

その濡れた瞳には、自分もかつてこの壇上で男たちの欲望のままに蹂躪された記憶が、消えない傷跡として沈んでいた。

セレナの瞳が、鏡合わせのような母の瞳と交錯した瞬間。

胸の奥が熱い鉄を押し当てられたように軋んだ。

（……お母様。わたくしも、貴女と同じ場所に立っているのですね。この瞳も、髪も、すべては捧げられるための装飾でしかなかったのですね……）

胃の腑から込み上げる吐き気を、セレナは必死に呑み込む。

だがその絶望を断ち切るように、無機質なシステム音声が始を告げた。

『生体ユニット、システム同調。フェーズ1：口腔粘膜における反応閾値計測を開始します』

半透明のパーテーションが重々しく開き、冷淡な目をした高位技術者が影のように現れる。

「私も、君のような美しい女性にこのような真似はしたくないのだがね。だが、これも『校正』という仕事でね。連合の未来のためだ、許してくれたまえ」

自らの欲望を「業務」へとすり替える白々しい言い訳を前に、セレナは重苦しく目を伏せた。

「.....理解.....しております。.....連合のために」

飲み込んだ言葉の代わりに、彼女は衆人環視の中、優雅な所作でゆっくりと跪いた。

顔を上げた彼女の鼻腔を、男から漂う鼻を突くような雄の臭いが突き刺す。

高級なオーデコロンの香りの裏側に隠しきれない、汗と脂、そしてどろりとした下卑た欲望が混じった生々しい体臭。

目の前に突き出されたそれは、血管が浮き出し、熱を帯びて怒張した暴力的なまでの「生身の肉」だった。

(.....あ、っ.....熱い.....。こんな、生々しいものが、わたくしの中に.....)

彼女は震える指先を床につき、覚悟を決めるように自ら唇を開いた。

熱を帯びた先端が唇に触れる。

過敏な粘膜がカリ首の猛々しいエッジと、尿道口から滲み出る粘り気のある塩気を鋭敏に拾い上げた。

だがその健気な服従を嘲笑うかのように、男の手が乱暴に彼女の銀髪を掴んだ。

「あ、ぐ……っ、ん、んぐう……っ！！」

後頭部を固定され、柔らかな口腔へと肉の塊を根元まで力任せにねじ込まれる。

淑女としての奉仕は瞬時に一方的な蹂躪へと塗りつぶされた。

逃げ場のない口内を熱く脈打つ肉が満たし、荒々しく抽挿（ピストン）を開始する。

ぐぼっ、じゅぼっ、ちゅるるっ。

掻き回された唾液が泡立ち、卑猥な水音がマイクを通して会場に響き渡った。

「んぐっ、ごふっ……！ お、え……っ」

男の腰が打ち付けられるたび、硬い亀頭が喉の奥の柔らかな襞（ひだ）を無慈悲に抉り開く。

鼻でしか息ができないパニック。

喉仏が強制的に上下させられ、突かれるたびに胃が持ち上がるような波状の苦痛が襲う。

限界まで研ぎ澄まされた口腔粘膜は、血管のドクドクという脈動やむせ返るような生臭い雄の熱量を、情報の暴力として脳へ叩き込んだ。

（……あ、っ……っ、い……ッ！ 息が、できな……、吐き、そう……っ！）

息が詰まるようなえずきと共に、抗いようのない涙が滲む。

だが強烈な嫌悪で拒絶しているはずの身体は、極限まで高まった神経の暴走によって裏切りを始める。

押し返そうとするはずの舌が、意に反してカリの裏側の溝へ吸い付くように絡みついてしまう。

(.....どうして.....っ、高潔であるべきわたくしが、こんなもので.....っ)

巨大モニターに大写しになっていたのは、涙と涎で顔を濡らし、雄の肉を咥え込んで無様に喉を鳴らす自分の痴態だった。

しかし限界を超えた神経は、その絶望的な屈辱すらも脳髓を焼く強烈なスパイスへと強制的に変換し始めていた。

(ちがう、わたくしは.....っ、こんなこと、で.....っ、あ、あ.....っ)

涎で満たされた口内が侵入者を歓迎するように卑しく熱を帯びる。

内側の肉が吸盤のように肉柱へ吸い付き、息苦しさすら、いつしか脳を溶かす快感へと塗り替えられていった。

「ん、ぐう.....っ、あっ.....じゅぷっ、ぐぼっ、あんっ♥♥」

呼吸すら奪われた喉の奥から、甘く濁った絶頂の喘ぎが漏れ出す。

生理的な涙と溢れる涎で顔をぐしゃぐしゃに汚し、顎の先からだらしなく糸を引く。

やがて男の腰がビクンと大きく跳ねた。

射精の気配。

(.....いや、だめ.....っ！)

反射的に顔を背けて逃げようとするセレナ。

だが、髪を掴んだ男の太い腕がそれを許さない。

無慈悲な力が彼女の頭を力任せに引き寄せ、喉の最奥、咽頭の壁にカリ首をガッチリと押し付けた。

「——っ！！？ ～～～っっ！！♡♡」

逃げ場を完全に塞がれた喉の突き当たりに、粘り気のある熱湯が勢いよく叩きつけられた。

ドクドクと脈打ちながら吐き出された白濁した種。

咽返るような強い生臭さと、濃厚な塩辛さ。

それが粘膜に触れた瞬間、過敏化された神経が成分を瞬時に解析し、脳髓へ「極上の快樂物質」として誤認信号を送りつける。

口内を満たす強烈な雄の味と熱量。

普通なら嘔吐するほどの量が、今の彼女には脳を溶かす甘露のように感じられた。

ごくん、ごきゅっ、と。

白く滑らかな喉が大きく波打ち、男の全てを搾り取るように嚥下していく。

喉ごしさえもが強烈な快感の電流となって背筋を駆け抜けた。

男が満足げに自身を引き抜く。

そこには口の周りを白濁と涎で汚し、熱に浮かされる「見る影もなく汚された令嬢」の姿があった。

『フェーズ1完了。口腔内残留物の確認を実行。口を開けなさい』

AIの無機質な命令。

セシナは震える顎を技術者に無理やり掴み上げられ、涙で濡れた瞳のまま、ゆっくりと唇を割った。

「あ、あ……っ♡♡」

だらしなく突き出された舌の上には、飲み込みきれなかった濃密な白濁がこびりつき、喉の奥から卑猥に糸を引いている。

巨大モニターがその惨めな内部を容赦なく大写しにし、会場に低くざわめくような欲望のうねりが広がった。

『フェーズ2：サイコ・リンク深度同調。新型デバイスの内部定着試験へ移行』

AIの声が、その熱に浮かされた痴態を冷徹に区切る。

喉の奥にこびりつく生々しい雄の熱量と、どろりとした粘度の余韻。

だがその熱い生身の残響をかき消すように、技術者が恭しく銀色のケースを開いた。

そこに鎮座していたのは、熱など微塵も持たない、冷徹で無機質な「プラチナの楔」だった。

新型オルガデバイス——ステラ・デバイス。

滑らかな流線型を描くボディは鏡のように磨き上げられた白金（プラチナ）と、半透明の硬質クリスタルで構成されている。

内部では核となる回路がサファイア色の光を淡く明滅させ、まるで呼吸する星そのもののように幻想的な輝きを放っていた。

それは見る者を魅了する芸術品としての美しさと、女性の柔らかな内壁を無慈悲に押し広げるための「軍用規格の凶器」としての冷徹さを完璧に融合させていた。

「位置につけ」

命令に従い、セレナは四つ這いになって豊かな尻を観衆の方へと突き出した。

恥辱に濡れたドレスが愛液の重みで秘部の裂け目に食い込み、腰を振るたびに「くちゃ、り」と卑猥な音を立てる。

その音さえもがマイクに拾われ、会場の男たちの嗜虐心を煽るBGMとなっていた。

「連合の未来のために」

技術者の指が蜜と布が癒着した秘所を無造作に掻き分ける。

熱く火照った粘膜が露わになり、すでに溢れ出していた愛液が卑猥に糸を引いた。

過敏な膣口が外気に触れただけでヒクンと収縮し、勝手に蜜を零す。

(.....いや.....っ、こんな、ところで.....体が、勝手に.....)

「あ、う.....っ」

生身の熱とは正反対の、凍えるようなプラチナの硬度が、震える入り口に直接押し当てられる。

冷たさにセレナの腰がビクリと跳ねた。

だが抵抗する間もなく、12センチのメインプローブが容赦なく膣口を割り始めた。

同時に、たわみを持たせた極細の鎖で繋がれた3センチのアンカーが後孔へとあてがわれる。

「——挿入（インサート）」

ずちゅ、ごりっ。

「あ、が……っ！！♥♥ ひ、い……っ！！」

重量感のある美しい異物が、過負荷に喘ぐ内壁を強引に押し広げながら深部へと沈み込んでいく。

肉の柔軟さを一切持たない冷たい宝石が襞の一つひとつを無理やり平らにならし、狭い産道をこじ開けていく暴力的な膨張感。

（お、もい……っ。硬くて、冷たいのが……奥まで……っ！）

12センチの楔は敏感な子宮口（ポルティオ）に無慈悲に突き当たり、その柔らかな入り口を押し潰してようやく停止した。

同時に後孔へねじ込まれたアンカーが括約筋を内側から食い破るように広げ、彼女の下半身を完全に塞いでしまう。

輝く栓が打ち込まれたのだ。

ごり、ごり、と。

呼吸をするたびに体内の冷徹な金属が内臓を圧迫し、その重みだけで腰が砕けそうになる。

にもかかわらず、限界まで研ぎ澄まされた彼女の粘膜は侵入してきたその無機物を「受け入れるべき雄」と誤認し、溢れ出る愛液で絡め取ろうと卑しく収縮を始めていた。

『定着確認。フェーズ3：サイコ・ミューによる遠隔高周波振動を開始』

技術者が冷徹に命じた。

「立て。装着状態での『歩行試験』だ」

命令に従い、セレナは震える膝に鞭打って立ち上がった。

乱れたドレスの裾を整え、観衆の方を向く。

(.....わたくしは、希望の星。完璧に、微笑まなくては.....)

エリートとしての矜持を総動員し、彼女は女神のような優雅な笑みを震える唇に貼り付ける。

一見すれば、そこにはただ優雅に佇む深窓の令嬢がいるだけだ。

体内に凶悪な楔が打ち込まれていることなど微塵も感じさせない。

これこそが新型デバイスの売りの一つである「ステルス性」だった。

だが技術者が手元の端末を操作した瞬間、その高潔な仮面は無惨に剥がれ落ちた。

骨盤の奥から脳髓を直接掴まれるような、暴力的な高周波振動が炸裂する。

「あ、っ……！ ん、んううう……っ！！♡♡」

優雅に微笑もうとした表情が、一瞬で快樂に歪んだ。

ハイヒールを履いた脚が、生まれたての子鹿のようにガクガクと無様に震え始める。

（……だめ、笑わな、くては……っ、なのに、体が……っ！）

「た、て……立てません……っ！ 足が、勝手に……っ！」

不可視の振動が内臓を揺らし、平衡感覚すらも快楽で塗り潰していく。

彼女は倒れそうになる体を必死に支え、モデルとして気丈に振る舞おうとする。

だがドレスの下の太ももは痙攣し、互いにこすれ合って卑猥な摩擦音を立てていた。

『最終フェーズ：デバイス稼働状態の視覚的公開（ディスクロージャー）』

「デバイスを、見せろ」

技術者の囁きに、セレナは涙に濡れた瞳で観衆に背を向けた。

震える手でドレスの裾を掴み、ゆっくりと腰までたくし上げる。

そして少しだけ前屈みになり、白く滑らかな尻を突き出してその「秘密」を露わにした。

ネクロ・シルクのベールが剥がされ、白日の下に晒されたのはかつて高潔だった女神の最も秘められた場所。

そこには美しく輝く「ステラ・デバイス」が溢れる愛液と泡立つ蜜でぬらぬらと濡れそぼりながら、彼女の全てを塞ぐ「栓」として深く埋め込まれていた。

「あ、う……っ♡♡ み、みなさま……ご覧、ください……ませ……っ♡♡」

サファイア色の光を放つその宝石は、痙攣するピンク色の粘膜の真ん中で彼女が誰の所有物であるかを冷酷に主張している。

冷たい異物を排出しようと、過敏な膣口が無様にヒクヒクと収縮を繰り返し、そのたびに溢れた蜜が小刻みに震えるプラチナを伝って滴り落ちる。

巨大モニターには、その収縮と連動して内壁のヒートマップが赤く点滅していた。

会場は熱狂的な拍手に包まれた。

壇下で父・ノヴァリス博士が冷たく微笑み、娘を「最高の機能を持つ男たちの玩具」として見せびらかしている。

（あ、あ……っ……わたくしは、ただの道具。父様の設計を証明するための、パーツなのだわ……）

葉液が忠誠心を強制的に呼び戻す。

彼女は再びドレスを整えて「希望の星」としての仮面を被った。

その直後、会場の照明が落ちて淫靡な音楽が流れ始めた。

展示という名の前座が終わり、選ばれた男たちのための「祝宴（本番）」が始まったのだ。

壇上から降りるセレナの視界の端で、最前列にいた母が男の膝の上に引き寄せられるのが見えた。

他の参列者の女性たちも次々とドレスを脱がされ、男たちの欲望を処理するための「生体パーツ」へと戻っていく。

（.....このエリュシオンは、男たちが女を飼い殺すための地獄。お母様、わたくしも、すぐにそこへ.....）

会場の外壁にある大型ビジョンでは全く別の光景が流れていた。

そこにはイラストリアスを優雅に屠り、一滴の汗も流さず微笑む女神セレナの姿。

要塞都市の民衆はその捏造された光景を見て熱狂し、自分たちが守られていると信じ込んでいる。

（希望の星として、死ぬまで踊り続けなければならないのですね
.....）

背後から聞こえる、母の押し殺した悲鳴。

セレナの首元でネックレスが脈動し、次なる死地へ向かうための薬液を無慈悲に注入する。

脳を灼くような電撃に身体が小さく痙攣し、直後に訪れた多幸感が強制的に思考を麻痺させていく。

それでも、胃の奥底には冷たい吐き気がこびりついて離れない。

彼女の紫の瞳の奥底で、人間としての涙が光を失ったまま微かに揺れていた。

霧がガラスを撫で、冷たい光がこの身も蓋もない支配の構造を白々と照らしていた。

3.鋼の狭間に咲く夢、虚構の残響

銀灰色の霧が首都要塞「エテルナ」の私室を重く包み込んでいる。

セレナ・ノヴァリスの白いベッドには、昨夜の「祝宴」が残した淫らな熱が逃げ場のない澱（おり）のように沈んでいた。

目覚めとともに襲いくるのは現実という名の鋭い刺痛だ。

数値上の「32%の神経汚染」は昨夜の処置で確実に中和されたはずだった。

だが一度限界まで焼き切られた彼女の感覚神経は、以前のような「静寂」を忘れてしまっている。

極薄のドレスが肌を擦った不快な摩擦の記憶。

無線信号（サイコ・リンク）によって骨盤を直接搔き回された暴力的な振動の残響。

そして自分を「製品」として値踏みしていた男たちの、ねめ回すような視線の感触。

高級な香水の裏側に隠しきれなかった鼻を突く雄の臭いが、洗浄したはずの肌に今も粘つくようにこびりついている。

(.....まだ、そこに、いるかのようです.....)

摘出されたはずの『ステラ・デバイス』の幻影。

神経の閾値が下がった彼女の脳は、未だに下腹部の奥に居座る「美しく冷たいプラチナの楔」の感覚を消し去ることができない。

寝返りを打つたびに昨夜無理やり拡張された場所が「空虚だ」と訴えるように熱く疼く。

物理的な不在がかえってそこが侵食された事実を強調していた。

壁の監視カメラ。

その赤いレンズが彼女の微かな戦慄さえも逃さず冷徹に点滅を繰り返している。

『セレナ様、訓練施設へ移動してください。08:00よりシミュレーター訓練を開始します』

AIの無機質な声が偽りの安息の終わりを告げる。

セレナは重い身体を起こし、グレーを基調とした強化スーツに身を包んだ。

ワインレッドの流線形ラインが走る最新のナノポリマー。

だが過敏化した今の彼女にとって、スーツの微かな摩擦さえもが焼けるような刺激となる。

股間のスライドパネルが下腹部に密着した瞬間。

昨夜の蹂躪を記憶している粘膜がビクリと跳ね、セレナは思わず息を詰めて膝から崩れ落ちそうになった。

壁に手をついて必死に身体を支え、小さく唇を噛んで耐える。

鏡に映る自分を紫の瞳で見つめた。

「.....希望の星として」

唇から零れた言葉は自分を律するための呪文だ。

そして同時に、自分という人間を殺し続けるための呪いのようでもあった。

訓練施設の金属壁はモニターの青い光を冷たく反射していた。

空間を満たすのは絶え間ない機械音と鼻を突くような消毒液の匂い。

その無機質な静寂を破るように、不釣り合いなほど明るい声が届く。

「セレナ少佐……っ！ 昨夜のニュース、拝見しました。本当に、本当に美しかったです！」

シミュレーターの前で待っていたのはマリナ・クレイマンだった。
無造作に切り揃えられた栗色のショートヘア。

白磁のように完璧なセレナの肌とは違う、わずかに日焼けして鼻の頭に愛らしいそばかすが散った健康的な頬。

何より印象的なのは、この薄汚れた要塞都市には不釣り合いなほど澄んだ大きな榛色（ヘーゼル）の瞳だ。

十八歳。

下層階級出身の少女。

彼女が纏う量産機「セクター」用のスーツは、小柄な彼女には少しサイズが合っていない。

その華奢な肩が、重厚な装備に今にも押し潰されてしまいそうに見える。

一見すると滑らかなスライドパネルの下。

そこには、戦闘中の激しいGの中でもデバイスのズレを防ぐための、大人用の『骨盤固定フレーム（ドッキング・ベース）』が隠されている。

いざコックピットシートに座り、突き出た極太のオルガデバイスが膣とアナルへと深く挿入されれば——金属製の拘束アームがガッチリと作動し、未成熟な彼女の狭い骨盤へ無慈悲に食い込むことになる。

サイズが合わないせいで、今はまだ閉じられているパネルの下からも、その残酷なロック機構の不自然なシルエットが痛々しく浮き上がっていた。

セレナはそこに、昨夜、無理やり拡張され固定された自分の姿を一瞬重ねてしまい、胸が鋭く締め付けられた。

マリナの瞳に宿る濁りのない純粋な憧れ。

その眩しさにセレナは目を逸らしたくなる衝動を堪える。

ホールの外で流されたプロパガンダ映像。

そこには美しい宝石のような楔に蹂躪され、涎を垂らして喘いでいた無様な「雌」の姿はない。

ただ神々しく民衆を導く「女神」としての虚構だけが、マリナのような無垢な魂を騙し続けている。

訓練のリプレイ映像の中で、セレナの「ネクサス・プロト」は踊るように優雅に舞い、粒子砲が仮想戦場の闇を裂く。

対照的にマリナの「セクター」は、機動の端々に物理的な限界を示す微かな遅延（ラグ）を滲ませていた。

AI制御の無人機（ハウンド）を統率する指揮官機としてその性能は十分に高い。

だがネクサスの「神速」に追従しようとすれば、通常パイロット用のシステムでは到底演算が追いつかない。

その負荷のツケは、すべてパイロットの「肉体」へと強制的に請求される。

機体が無理な機動の電力を捻出するため、安全装置（リミッター）を無視して極太のデバイスを暴走させ、未成熟な子宮口を容赦なく打ち据えるのだ。

一瞬、マリナの顔が苦悶と羞恥に歪み、唇を噛んで絶頂を耐える姿がモニターに映った。

それを見た瞬間、セレナの下腹部でも『不在の楔』が共鳴するように熱く疼き始める。

オルガシステムの過酷な代償である、死亡率70%という現実。

(.....彼女も、美しく装飾された『使い捨ての鋼鉄（電池）』に過ぎない.....)

セレナの内心でその残酷な事実が重く響き渡った。

「セレナ様、いつか.....みんなが少しでも楽に暮らせたなら良いなって、思うんです」

マリナがぼつりと呟いた。

下層階級の飢え、監視の重圧。

それらを知りながらもなお明日を信じるマリナの言葉が、セレナの「責任感」という名の傷口を掻き立てる。

(.....マリナ。わたくしは、貴女が思っているような綺麗な人間ではないのよ.....)

眩しすぎる希望の言葉に、セレナの胸の奥でひび割れた人間性が微かに悲鳴を上げた。

自分たちの本当の惨めな姿を教えてしまいたい。

そんな衝動が喉まで出かかる。

だが言いかけた言葉を、セレナは血を吐くような思いで飲み込んだ。

仮面を被り続けることだけが、この狂った世界で彼女を守る唯一の手段だと知っていたから。

夜。

私室に戻り、シミュレーター訓練の汗と疲労をシャワーで洗い流したセレナは、薄いシルクの寝衣だけを纏ってベッドに腰を下ろした。

ようやく一人で息をつこうとしたその時。

部屋のドアが、無音で滑るように開いた。

そこに立っていたのは、母・テレジアだった。

セレナは弾かれたようにベッドから立ち上がり、居住まいを正す。



自分と同じ銀糸の髪と紫水晶の瞳。

だが、その姿はセレナにとって、あまりにも残酷な「未来の鏡」だった。

彼女が纏っているのは、妻としての寝衣ではない。

彼女を所有する『夫』の嗜虐的な趣味を完璧に反映した、漆黒の極薄シルクガウンだ。

まだ硬さを残すセレナの肢体とは違い、長年「楽器」として丹念に手入れされ、弾き込まれた豊満な肉体が、透ける生地の下で生々しく波打っている。

シルク越しにもはっきりとわかるほど大きく色付き、常に硬く尖らされた乳首の突起。

首筋から豊かな胸の谷間にかけて、無惨に散らばる赤黒い斑（キスマーク）。

そして滑らかな首元には、主人の認証を刻んだ銀のチョーカーが冷たい光を放っていた。

部屋に流れ込んだのは、むせ返るような高級香水と、隠しきれない濃密な「雄の匂い」だ。

微かな汗と体液の湿気が、つい先刻まで、彼女がその『主人』の膝下で何をさせられていたのかを残酷に物語っている。

「お母様.....」

息を呑む娘の前で、テレジアは壁の監視カメラの赤いレンズを一瞥し、はっきりと通る声で告げた。

「就寝前の、精神状態および忠誠度の定期確認（ロイヤリティ・チェック）を実行します」

システムに対する事務的な入室の口実。その直後、彼女は完璧な、そして虚ろな微笑みを娘へと向けた。

昨日、男たちの前で蹂躪されていたかつての「希望の星」。その瞳の奥の魂は、とうの昔に死に絶えている。

「素晴らしい披露会でしたね、セレナ。父様の設計を完璧に証明しました。これからも希望の星として輝きなさい」

模範的な賛辞。

だがその濡れた瞳の奥には、同じ地獄を歩む娘への深い諦念と悲哀が沈んでいる。

セレナにはそれが痛いほどわかっていた。

だからこそ、ほんの少しだけ、仮面の隙間から本音を零してしまった。

「.....今日、シミュレーター訓練で下層のパイロットと話しました。マリナという、とても純粋で、温かい子でした。彼女のような子がいるなら、わたくしも——」

「いけません、セレナ！」

突然、テレジアが激しく怯えた声で娘の言葉を遮り、すがりつくように一步詰め寄った。

「下層の者と馴れ合うなど非効率です。無駄な感情は貴女を壊し、私たち家族を滅ぼします。.....連合のために、余計な心は捨てなさい」

それは娘への心配のようでいて、その実、連合の連帯責任への恐怖から娘を縛り付ける「枷」そのものだった。

自分と同じ地獄を受け入れることだけが、生き延びる唯一の手段。

母の哀しい呪縛に、セレナが息を呑んだその時。

室内の空気をさらに凍りつかせるように、通信モニターが冷たく点灯した。

そこに映し出されたのは、父であるアルバート・ノヴァリス博士の、血の通わない貌（かお）だった。

アルバートは室内に同席している妻を一瞥もせず、冷徹な声で告げた。

『下層パイロットと馴れ合うな、セレナ。希望の星にふさわしくあれ』

「.....ですが、彼女も連合の兵士です」

微かな反論。

だがそれを許すほどアルバートの支配は甘くない。

監視カメラが警告音を鳴らすと同時に、首元の金のネックレス（チョーカー）が激しく脈動した。

脳を灼くような電撃信号が走り、セレナの身体が小さく痙攣して床に崩れ落ちる。

「ん、あ……っ！……あ、あ……っ！！♥」

喉の奥で屈辱的な喘ぎが漏れる。

過敏化した神経には、その電撃さえもが甘く不快な痺れとして増幅される。

ナノ分子が脳内のセロトニン濃度を強制的に操作し、動揺を抑え込むための暴力的な「多幸福感」が全身を駆け巡った。

苦痛ではなく、薬漬けの幸福によって思考を奪う。

それこそがアルバートの施した最も残酷な躰だった。

娘が強制的な法悦に喘ぐ姿を前にして、母・テレジアはただ無言で頭を垂れ、逃げるように私室から退室していく。

実の母にすら見捨てられる絶望。

『無駄な感情は効率を損なう。次の任務は東アジア沿岸・ゴーストラインだ』

父の視線が画面越しに娘の腹部を射抜く。

昨夜、美しい楔を沈められた場所を。

『ステラ・デバイスの性能を、実戦データで完璧に証明しろ。編成はネクサス・プロト、およびセクター二機。.....マリナ・クレイマンを随伴させろ』

多幸感で麻痺しかけていたセレナの思考が、恐怖で凍りついた。

(マリナを.....あの死神が待つ死地へ？)

『以上だ』

通信が切れた後、セレナは震える両腕で己の身体を抱きしめ、糸が切れたようにベッドへ倒れ込んだ。

摘出されたはずの「楔の幻影」が、彼女の動揺に呼応するように熱を帯びて脈動する。

「セレナ様、気をつけて」

マリナが別れ際に囁いた声が、今も耳の奥にこびりついて離れない。

祈るような思いも窓の外から響く波音にかき消されていく。

ネオ・ロサンゼルスが霧が深まっていく中、セレナは重い瞼を閉じた。

微睡みの淵で東アジアの冷たい霧が脳裏をかすめ、理由のない悪寒が背筋を撫でた。

彼女はまだ知らない。

その見知らぬ霧の奥で、全てを無慈悲に刈り取る『黒鋼の死神』がすでにその鎌を研いで彼女たちを待っていることを。

機体設定集

XN-00『ネクサス・プロト』セレナ・ノヴァリス専用機

連合の技術を結集した、試作型高性能オルガマシン。

セレナの気品と冷徹な使命感を体現する、優雅でありながらも殺意に満ちた印象を持つ機体。



機体概要： 全高14メートル。流麗な曲線で構成された人型フォルムを持つ。カラーリングは連合の象徴である冷徹なグレーを基調とし、セレナのパイロットスーツと同じワインレッドのラインが全身を流れる。

ナノポリマー製の装甲は、セラフィック・オーダーのセラフィムにも通じる曲線の美しさを持ちながら、高い耐久性と軽量化を両立させている。

武装：

肩部粒子キャノン： 両肩に装備された主武装。長大な砲身から高威力の粒子ビームを放ち、重装甲を貫く。有効射程は8kmに及び、長距離からの精密射撃を可能にする。

粒子ライフル： 手持ち式の連射型ライフル。中装甲の敵機を制圧するのに適しており、セレナの冷静な判断力と精密な射撃技術を最大限に活かす。

ミサイルポッド： 背部に内蔵されたミサイルポッドから、追尾性能に優れたミサイルを発射する。複数の目標を同時に攻撃でき、戦術的な柔軟性を高める。

レーザーブレード： 腕部に装備された近接武器。緊急時の対オルガマシン戦や、接近戦での切り札となる。

特殊システム：

ステラ・デバイス（常時挿入型ワイヤレス・インターフェース）： コックピットのシートとパイロットを物理ケーブルではなく、不可視の遠隔信号（サイコ・ミュー）で完全同期させる最新鋭のデバイス。

サイコ・ミュー増幅器： コックピットのオルガシステムに組み込まれた、ネオタイプであるセレナの高い脳波感应性を増幅するシステム。絶頂時の出力低下を最小限に抑え、機体反応速度を極限まで向上させる。

記録ドローン： 常に複数の記録ドローンが随伴し、戦闘データを記録してプロパガンダ映像として利用される。

作品名:輝ける星の戦場『残夢』

発行日:2026年4月20日

発行者:XYZ_L

連絡先:<https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード(SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む)を固く禁じます。
